

《研究ノート》

## 韓国の伝統楽器タンソ(短簫)の基礎奏法と指導法

阪 井 恵

### はじめに

#### 1. タンソ(短簫)とは

タンソ(단소、短簫)は、朝鮮民族の伝統的な楽器として知られる、リードをもたないタイプの縦型フルートである。継ぎ目のない1本の竹のフシを抜いて作られ、長さは40センチメートル程度である。尺八を細く短くしたような形状、たとえば一般の日本人にはイメージしやすいだろう。

タンソは、管上端の切り口前側が歌口となる。その部分を管の内部に向けて斜めに削り落とし、その斜面と管の外壁面との間にできる弧形のエッジに、息を吹きつけて発音する。この歌口は、竹の管の内側をそぎ落としており、中国に同形の楽器「洞簫」があることから、音楽学の専門用語としては「洞簫タイプ」と呼ばれる。尺八の仲間では一節切がひとよぎりこのタイプである。一方、通常の尺八の歌口は、逆に管の外側を削り落として作られており、「尺八タイプ」と呼ばれる。

タンソの場合、竹の使い方は、根のほうが下部にくるのが普通である。この点では尺八と同じで、一節切とは逆になっている。



写真1 タンソ(短簫)(竹製)

指孔は裏側（構えたときの身体側）に1孔、表側（構えたときの外側）に4孔の、合計5孔である。この点は、一般的な尺八、一節切とも同じである。

## 2. 本稿の目的

タンソ（短簫）は、構造的に単純で持ち運びにも適したサイズである。韓国の小中学校では、民謡や伝統的な音楽へ誘うために有用であるとして、現在広く用いられていると聞く。しかし、日本における音楽教育関係の文献では、これまで特に紹介されていない楽器である。これを踏まえ、本稿は以下のことを目的とする。

- (1) タンソ（短簫）について、その基礎的な奏法と指導法を紹介すること。これに際しては、韓国ソウル市在住で「タンソ吹奏運動推進本部」の事務局長であり、タンソ指導を精力的に行っている朴喜徳（박희덕、Park Hee Duck）氏<sup>1</sup>から筆者が受けた指導、同氏の著しているタンソの教則本を資料とする。
- (2) 日本の音楽科教育における韓国音楽の扱い方を踏まえた上で、タンソを取り入れて学習することの可能性について考察すること。
- (3) 日本でよく知られている易しい歌で、タンソで演奏するのに適したものを選び、タンソの楽譜として用いられている井間譜（정간보）を作成、提示すること。今日、中学校・高等学校において諸民族の音楽についての指導が欠かせなくなり、教員養成課程の「音楽科教育法」等の授業においても、諸民族の音楽を体験することが求められている。このような楽譜は、韓国の伝統音楽を採り上げて学ぶ機会に、資料として有用と思われる。

## I 本稿の背景：音楽教育をめぐる、過去20年余りの日韓交流

### I-1. 日本の音楽科教育関係の文献における、韓国伝統音楽の扱い（先行研究）

音楽教育に関する先行研究を見ると、1990年ごろから、日韓の音楽交流史に関連した記述を含む文献や研究、および韓国の伝統音楽を日本の学校現場に紹介し、体験を促すための研究が、学会の口頭発表や雑誌に登場し始めている。その頃から、今日の「韓流」に直接つながる日韓の文化交流が萌したと思われる。

和田垣究は自ら韓国の音楽を学び、1980年代から日本の中学・高校の音楽授業に、教材として取り入れる実践を行っていた先駆者である。和田垣（1993a）、（1993b）はともに、韓国音楽の特質を紹介しながら、その特質と切り離すことのできない学習構造（どのような方法でその音楽を学ぶのか）に着目している。日本の中学・高校における韓国音楽体験の実践事例としては、周期的なリズム型を意味する「長短（장단）<sup>2</sup>」の学習を切り口に、サムルノリ<sup>3</sup>の基本構造を体得する内容のものを、特に詳述している。

坪能由紀子／望月由美子（1993）は、坪能由紀子による「世界の音楽に親しもう」プロジェクトの一環として、やはりサムルノリを中心に韓国音楽を紹介した。同時に、打楽器アンサンブルとしてのサムルノリの音楽的な構造原理に着目し、それを中学校における「音楽づくり」の活動に発展させている。ここには、和田垣究も簡単な韓国音楽の解説を寄稿している。

鳥崎篤子／加藤富美子（1999）は、韓国の音楽を広範囲に紹介しており、歌唱曲（日韓

の歌詞による)として、《アリラン》、《リムジン河》、《三本道》の楽譜と解説を載せている。《三本道》を杖鼓<sup>チャンゴ</sup>のリズム伴奏で歌えるようにし、それを打楽器アンサンブルとしてのサムルノリの体験に発展させるというアイデアも示された。サムルノリの体験について、やはり最も多くの紙幅が割かれている。タンソについて、韓国の伝統的な楽器の1つとして紹介しているが、構造や奏法等への言及はない。

和田垣究(1999)は、日本では韓国の音楽の特徴として認識されている「3拍子」の問題を、日常の身のこなしや杖鼓を打つ動作などとの関連から考察した。3拍子と安易に捉えることに疑義を呈し、これが音楽学的に興味深い広がりをもつ問題であることを示唆している。ここでも、学校現場における韓国音楽の扱いという実践的な面での情報提供は、リズムの問題に限定されている。タンソ等の旋律楽器への言及はない。

田中多佳子(2007)は、打楽器アンサンブルとしてのサムルノリを共通の教材として、小・中・高・大学の各段階で実践を展開するという3年にわたるプロジェクトの記録である。複数校種で行ったプロジェクト全体の概要を報告するとともに、音楽科教育教材としてのサムルノリについて、実践するにあたり有効で魅力的な面と、配慮を要する問題点の両方を挙げて総括している。

音楽教科書における韓国音楽の扱いはどのようなであろうか。最近使用されている中学校・高等学校の検定教科書<sup>5</sup>を見ると、諸民族の音楽に触れるという意図のもとに、歌唱曲として《京畿道アリラン》<sup>キョンギド</sup>と《故郷の春》<sup>7</sup>が掲載されている。《京畿道アリラン》に付随させて、簡単な長短の基本型が紹介されているものもある。それ以外は、サムルノリもしくはサムルノリの原形である民俗音楽（農楽）<sup>インアック</sup>の写真と数行の解説があるのみである。

結局これまでのところ、音楽科教育関係の先行研究は「打楽器アンサンブルとしてのサムルノリ」の教材化と、その応用としての「音楽づくり」<sup>8</sup>という授業展開に集中していると言えよう。サムルノリは旋律楽器を持たないリズム・アンサンブルなので、日常生活で誰もがやっている打つ動作が出来れば始めることができる。たやすく音が出ることは、技術的な障壁に阻まれることなく音楽を楽しむことにつながる。学校の授業は時間的な制約の大きい場であるため、このような打楽器アンサンブル中心の韓国音楽の扱いが定着してきたと考えられる。

リズム面以外の韓国音楽の特質は、これまで体験する手立てがあまりなかったことが明らかになった。本稿で、旋律楽器であるタンソを紹介し、韓国音楽におけるふし扱いの特質（後述）に対する理解にもつなげることが出来れば、意義のあることだと思われる。

## I-2. 本稿をまとめるに至る経緯

筆者が、タンソを初めて手に取り、その奏法を学んだのは、2010年1月9日～10日に開催された「韓日合同音楽教育ゼミナール」(於：ソウル市内の建国大学校)においてである。日本音楽教育学会と韓国音楽教育学会は2003年に姉妹学会協定を結び、交流を深めるようになった。2008年1月には、第1回「日韓合同音楽教育ゼミナール(於：東京都内日本女子大学目白キャンパス)」が開催されている。上記の2010年1月のゼミナールは第2回の合同ゼミナールであった。2回とも、シンポジウム、ラウンドテーブルなどの研究交流、個人の研究発表に加え、各種実技のワークショップ、コンサートが開催され、その概要はそれぞれの報告書<sup>9</sup>にまとめられている。

第2回合同ゼミナール1日目（2010年1月9日）に、朴喜徳氏による「タンソ（短簫）とリコーダーの奏法比較」と題したワークショップが開かれた。参加者の大半は韓日の音楽教師で、これまで習ったことのないタンソとその奏法について知りたいと考えていた。そのためワークショップは、実質的にはタンソ奏法の講習という形で進められた。筆者も初めてタンソに触れ、音の出し方及び楽器のサポート（持ち方、構え方）、さらに「井間譜（정간보）」という朝鮮半島の伝統音楽に使われる楽譜の読み方を学んだ。朴喜徳氏が、独自に開発しているプラスチック製のタンソをご恵贈くださったので、ゼミナール後はそれを持ち帰って練習した。4か月後の2010年5月に、再度ソウルへ朴喜徳氏を訪ね、改めてご指導を仰ぎ、短時間のゼミナールワークショップでは触れられなかったことを教えていただいた。その後は、質問などを電子メールでやり取りしながら今日に至っている。9か月余りのタンソ学習ではあるが、本稿では、タンソの初歩的な奏法や井間譜の読み方についてまとめておきたい。

## II タンソ奏法の実際—ドルギ・タンソを使用して—

### II-1. 朴喜徳氏によるワークショップの概要

2010年1月9日に行われた朴喜徳氏のワークショップは、ゼミナール日程の都合上、40分という短時間の枠で行われた。内容的には参加者の希望もあり、タンソの奏法が中心だった。当日の講義、実習内容は以下のとおりである。

- ・楽器の構え方
- ・「トンギム（통금）」(丹田呼吸に支えられた吹き方の技法) の概念
- ・音出しの試行
- ・井間譜の説明
- ・《Amazing Grace》の演奏に挑戦、余裕がある人は《アリラン》にも挑戦

タンソに初めて触れ、この楽器は韓国の古典音楽・民俗音楽の深みに通じているにもかかわらず、アマチュアとしてジャンルにとらわれずに音楽を楽しむためにも適した楽器であると思った。ワークショップでは、朴喜徳氏による古典曲の演奏を聴かせていただいた一方、参加者は韓国音楽ではない《Amazing Grace》の演奏に挑戦したが、そのどちらもタンソの音色になじみがよく、味わい深いものであると感じられた。《Amazing Grace》や《アリラン》は、タンソの第一オクターヴ（日本流に言えば<sup>りよ</sup>呂音域）で出せる5つの音（階名では上からミ・レ・ド・ラ・ソ）に、第二オクターヴ（日本流に言えば<sup>かん</sup>甲音域）のソ（階名）を加えただけの6音から成り立っている。後述するが、このタイプの曲は身近に多数あって親しまれており、レパートリーが豊富である。この6音を扱うだけならば、笛を吹くことに慣れていない人でも、指使いの習得にも時間がかからず、無理なく上達できそうである。

最大の問題は、音を出すコツを体得できるかどうか、である。特筆すべきことは、実はこの日のワークショップが、朴喜徳氏の開発した、特別なタンソを貸与することによって行われたということであった。このタンソはプラスチック製で、「ドルギ（달기、突起）・タンソ」と命名されている。初心者が音を出しやすいように、歌口の弧形エッジ部分の上両端に、高さ1ミリメートル足らず、直径1.5ミリメートルほどの、点のように小さな

突起をつけ、それによって息が漏れるのを防ぐというアイデアを実現したものである。日本の篠笛等でも、初心者に息を吹き込む角度を体得させるため、何がしかの補助具をつけるというアイデアは昔からある。しかしドルギ・タンソのアイデアは、補助具というほど大きな装置ではない、すぐれたアイデアで感心させられた。



写真2 ドルギ・タンソの歌口部分

ドルギ・タンソに助けられて、ワークショップ参加者が音出しのコツをつかむのは早かった。1人1人は途切れがちながらも、一斉奏としては《Amazing Grace》や《アリラン》が旋律の形を成して、40分のワークショップは終了した。

## II-2. ドルギ・タンソを使用したタンソ奏法およびその指導法

——導入段階から「タ・ホワン・ム・イム・チュン（階名では、上からミ・レ・ド・ラ・ソ）」の5音が出せるようになるまで——

この項では、朴喜徳氏作成の資料や著作<sup>10</sup>をもとに、同氏から筆者が受けたご指導を参考に適宜表現を補いながら、タンソの初歩的な奏法とその指導法を紹介していく。特に朴喜徳氏が最近筆者にお送り下さった資料<sup>11</sup>は、小学生への指導を想定したもので大変丁寧に書かれている。日本の現場でも大いに参考になることと思う。以下、その資料の書きぶりをあえて省略せずに訳しながら、本稿の目的に応じて筆者が補ったものである。

【呼吸法】「丹田（단전 Dan Jeon）」呼吸を習得する。

第1ステップ：最も基本的な練習である。

- (1) 姿勢は、椅子に背筋を伸ばしてすわり、左手親指をお臍の位置に付け、手のひらを下腹部にあてる。右手を左手に重ねる。
- (2) 呼吸は、鼻から5秒かけて息を吸い込み、下腹部を拡張させる。次に、口から6～7秒かけて息を吐き出し、下腹部をそっとへこませていく。

第2ステップ：第1ステップを少しずつ高度にしていく。

- (1) 姿勢は第1ステップと同様であるが、さらに眼を閉じて身体全体をリラックスさせる。
- (2) 呼吸は、鼻から10秒かけて息を吸い込み、下腹部を拡張させていく。次に口から10～11秒をかけて息を吐き出し、下腹部をそっとへこませていく。

第3ステップ：さらに高度にしていく。

- (1) 姿勢は第2ステップと同じ。
- (2) 呼吸は、鼻から10秒かけて息を吸い込み、下腹部を拡張させていく。その状態で一度静止し、次に、口から10～11秒をかけて息を吐き出し、下腹部をそっとへこませていく。全部を吐き出さずに再び静止し、さらに10～11秒をかけて息を吐き出す。

第4ステップ：丹田呼吸を実際の演奏に使えるようにしていく。

- (1) 姿勢は第3ステップまでと同じ。
- (2) 今度は、鼻から急速に息を吸い込み、下腹部を拡張させる。次に、できるだけ時間をかけて口から息を吐き出し、下腹部をそっとへこませていく。
- (3) 以上を繰り返す。

第5ステップ：タンソの高音（甲音域）を吹くための方法を学ぶ。

- (1) 姿勢は第4ステップまでと同じ。
- (2) 呼吸については、第4ステップと同じだが、口から息を吐き出すとき、叫ぶときのように、息のスピードを速く出す練習をする。
- (3) 以上を繰り返す。

【身体と指のストレッチ】両手の指や上半身を柔らかくする。

(1) 手について

- ・両手をほぐす運動をする。
- ・指と指の間を広げるようにする。右手の指どうしは、左手を使って広げ、左手の指どうしは、右手を使って広げる。
- ・両手の指を広げ、同じ指どうしの先を合わせて、押し合いをする。
- ・他の人と、手のひらをあわせ、互いの指で押し合いをする。

(2) 身体について

- ・両足を軽く開いてまっすぐ正面を向いて立つ。
- ・両腕を腰の後ろ側にあて、両肘を後ろへ引くようにして、両肩を起こし、水平にする。
- ・その姿勢から顎を天井に向けて上げていき、首の前側を伸ばす。
- ・逆に首を前へ倒していき、首の後ろ側を伸ばす。
- ・首を左右に回す。
- ・タンソの両端を左右の手で軽く握り、顔の前に持ってきた状態から、腰をひねって左を向いたり右を向いたりする。
- ・タンソの両端を左右の手で軽く握り、両腕を伸ばして上げる。その姿勢から身体を左右に倒し、体側を伸ばす。
- ・タンソの両端を左右の手で軽く握り、両腕を伸ばして上げる。その姿勢から両腕を後ろへ引くようにして、胸を伸ばす。
- ・タンソの端を片手で軽く握り、それを使って背中を軽く打ってほぐす。

【タンソ各部の名称】

- ① 歌口：楽器最上部の前側、息を吹き込むところ

- ② 1の孔：楽器を構えたとき、身体側（裏側）のほうに1つだけある孔
- ③ 2の孔：表側の一番上にある孔
- ④ 3の孔：表側の上から2番目の孔
- ⑤ 4の孔：表側の上から3番目の孔
- ⑥ 5の孔：表側の上から4番目（一番下の）の孔

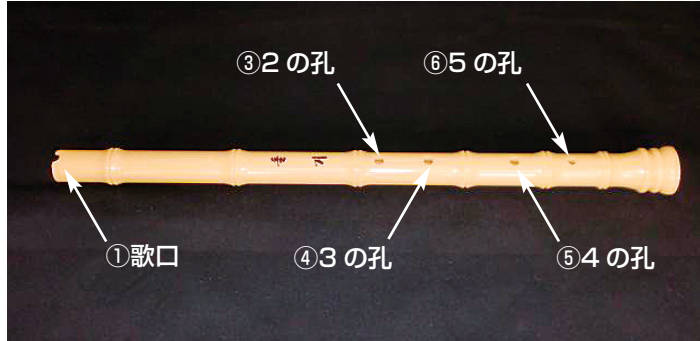


写真3 ドルギ・タンソ表側



写真4 ドルギ・タンソの裏側

### 【タンソの構え方】

#### 基本の構え方

- ① 1の孔を左手親指でふさぐ
- ② 2の孔を、左手人差し指でふさぐ
- ③ 3の孔を左手中指でふさぐ
- ④ その状態から、左手薬指と小指は、楽器の左サイドにつけておく。
- ⑤ 右手の親指を、楽器の裏側（身体側）につける。
- ⑥ 4の孔を右手の中指でふさぐ
- ⑦ 右手の人差し指と薬指は、楽器の前側につける。
- ⑧ 右手の小指を楽器の下部右寄りにつける。
- ⑨ 5の孔はふさがなくて、開けたままにしておく。



写真5 タンソの構え方

【基本になる5つの音】

基本の指使いで、次の5つの音が得られる。この音の呼称と指使いを一致させ、併せて5音の音程関係を、あらかじめ覚えてしまうのが得策である。5つの音の呼称は、

汰 (Tae) <sup>ホワン</sup> 潢 (Hwang) <sup>ム</sup> 無 (Moo) <sup>イム</sup> 林 (Im) <sup>チュン</sup> 仲 (Jung)

で、これは、近似の西洋音名と対照するならば、汰 (=F4)・潢 (=E♭4)・無 (=D♭4)・林 (=B♭3)・仲 (=A♭3) に相当する。階名ならミ・レ・ド・ラ・ソになるこれらの音を、タンソでふさぐ指孔を1つずつ増やしながらか、歌って覚えるとよい。

- ① 汰 (Tae) = F4 = 階名ではミ：どの指孔も開けたまま。
- ② <sup>ホワン</sup> 潢 (Hwang) = E♭4 = 階名ではレ：1の孔だけをふさぐ。
- ③ <sup>ム</sup> 無 (Moo) = D♭4 = 階名ではド：1と2の孔をふさぐ。
- ④ <sup>イム</sup> 林 (Im) = B♭3 = 階名ではラ：1、2、3の孔をふさぐ。
- ⑤ <sup>チュン</sup> 仲 (Jung) = A♭3 = 階名ではソ：1、2、3、4の孔をふさぐ。

絶対音高は問わなくてよいが、「Tae - Hwang - Moo - Im - Jung」を「ミ - レ - ド - ラ - ソ」の音程で歌いながら、指使いの練習をしておくと、後々役に立つ。

また、易しいレパートリーを吹くことを視野に入れ、この段階でもう1つだけ、次の特別な指使いを覚えてしまうとよい。タンソは、他のフルート類と同様、息のスピードを変えることによってオクターブピッチを変えるが、高いほう（甲音域）の「汰 (Tae)」だけは運指も変わる。以下、低いほうのオクターブ（呂音域）と高いほうのオクターブ（甲音域）を発音するために、押さえる孔を示しておく。



表 1 基本の音の運指

音名の譜字	音名の発音	ふさぐ指孔	近似ピッチの西洋音名（英語）	階名
仲	Jung	1・2・3・4	A♭3	ソ
林	Im	1・2・3	B♭3	ラ
無	Moo	1・2	D♭4	ド
潢	Hwang	1	E♭4	レ
汰	Tae	なし	F4	ミ
沖	(High) Jung	1・2・3・4	A♭4	ソ
淋	(High) Im	1・2・3	B♭4	ラ
無	(High) Moo	1・2	D♭5	ド
潢	(High) Hwang	1	E♭5	レ
汰	(High) Tae	1・3	F5	ミ

【音出しの方法】

(1) 楽器をもたずに適正な姿勢をとる。

- ① 背筋を伸ばして椅子にすわる。
- ② 証明写真を撮るときのように、上下の唇を合わせて口を閉じる。
- ③ 丹田呼吸で息を取り、閉じた唇の中央部に少しだけ隙間をつくって、安定して息を吐き出す。唇の前に水平にした手のひらを持っていき、息のスピードや量が安定して出続けることを確認する。
- ④ これを繰り返す。

(2) 突起 (dolgi 돌기) の感覚をつかむ

- ① 証明写真を撮るときのように、上下の唇を合わせて口を閉じる。
- ② 右手のひらを外側に向けて顔の前に持ってきて、肘を少し緩める。親指と他の指の間にV字形をつくり、そこにタンソの下から1/3くらいの長さのところを乗せる。
- ③ タンソの唄口のほうを唇につけ、タンソが水平になるようにする。その際、突起の感覚を唇で確かめ、下唇の中央にあてる。
- ④ 楽器の角度を少しずつ変え、身体と45度の角度に持っていく。
- ⑤ 上の①から④の過程を何度も繰り返してみる。

(3) 楽器を構える正しい姿勢

- ① 頭はまっすぐ正面にむける。
- ② タンソを、腕の力が抜けた自然な形で構える。
- ③ 突起を下唇の中央にあて、楽器を一度水平な角度まで持ち上げる。
- ④ 楽器を身体から45度の角度まで下げてくる。
- ⑤ 視線は下に向ける。

(4) 音の出し方

- ① 突起を下唇の中央にあてる。
- ② どの孔もふさがないまま、タンソを身体から45度の角度に構える。
- ③ 息を吹き込む。この時、唄口の中と外へ息が半々に分かれるような角度でふく。

④ 場合により、唄口をほんの少しだけ左右に回し、よく音の出る位置に調整する。音を出すための4つのキー段階を、①水平に構える②突起を上下唇の間にあてる③45度の角度、そして④プー（吹き込む）と覚えるとよい。

(5) 基本の5つの音（呂音域の音）を出す。

上から下へ、汰（Tae）⇒潢（Hwang）⇒無（Moo）⇒林（Im）⇒仲（Jung）。逆に下から上へ、仲（Jung）⇒林（Im）⇒無（Moo）⇒潢（Hwang）⇒汰（Tae）を繰り返して練習する。一息で、5つの音を吹けるようになることが大切である。

(6) 高いほうのオクターブの音（甲音域の音）を出す。

これは、呂音域の音を吹くときより、息のスピードを上げる。指使いは、基本的に呂音域と同じだが、「汰」の甲音（1と3をふさぐ）だけ注意を要する。（前出の表1参照）

以上、本項（Ⅱ-2）では、朴喜徳氏作成の資料や著作に沿って、翻訳を適宜補いながら、ドルギ・タンソの初心者への指導法を紹介した。

### Ⅱ-3. <sup>チョンガンボ</sup>井間譜とその読み方について

<sup>チョンガンボ</sup>井間譜は、一見すると方眼紙のようなマス目（これが「井間」<sup>チョンガン</sup>と呼ばれる）の中に、譜字が記入された縦書きの楽譜で、上から下、右の行から左の行へと読み進める。井間譜は井間1つ分を拍の1単位と数え、曲のリズムを出来るだけ正確に表すために考案された一種の定量記譜法である。朝鮮語を表記するために考案されたハングルと同様に、李朝第四代の世宗大王（1397-1450）の業績の1つとされているものの、明確な起源は不明という。しかし、遅く見積もっても15世紀には使用されている。音価を合理的に表す独自の方法が、世界的に見ても早い時期に発明されていたことは注目に値する。日本の伝統音楽と呼ばれるさまざまなジャンルの音楽が、楽器や学習法に合わせて多様な楽譜を使用してきたのと同様、韓国にも多くの記譜法が存在する。タンソは、調律が比較的安定する楽器で、1つの譜字におおむね1つの指使いが対応するせいも、井間譜が使用されてきた。

前項で既に使っている、音名を表す譜字についても簡単に解説する。中国や朝鮮の伝統音楽理論は、西洋音楽と同様に1オクターブを12の音高に分ける十二律を定め、以下のように命名している。

表 2<sup>12</sup>

中国音名	黄鐘	大呂	太簇	夾鐘	姑洗	仲呂	蕤賓	林鐘	夷則	南呂	無射	應鐘
ほぼ対応する西洋音名（英語音名）	D	D#	E	F	F#	G	G#	A	A#	B	C	C#
日本音名（参考）	ニ	嬰二 変ホ	ホ	ヘ	嬰ヘ 変ト	ト	嬰ト 変イ	イ	嬰イ 変ロ	ロ	ハ	嬰ハ 変ニ

韓国の伝統音楽では、これらの音名の最初の文字だけを取り、それを韓国語の発音で使用する。12の音名を示す譜字はすなわち、「黄・大・太・夾・姑・仲・蕤・林・夷・南・無・應」であるが、タンソで基本になる5つの音は、この中の「太・黄・無・林・仲」ということになる。音名の表記は、オクターブピッチが上がると、譜字の左側に「ㄷ（サン

ズイ)」を付けて表し、もう1オクターブ上がればさらに左側にもう1つ「ㄷ」をつける。逆にオクターブピッチが下がると「イ（ニンベン）」をつけ、さらに下がると「イ（ギョウニンベン）」をつけることになっている。タンソで、まず出せるようになる基本の5音（呂音域）は、下から仲・林・無・（ここからオクターブピッチが上がる）潰・汰である。そして、前項で6音目の音として述べてきた「仲」の甲音の表記は、これにサンズイをつけた「沖」である。「汰」の甲音の表記は「汰」となる。このように日本の文字にはない譜字が音名として使用されているのである。

井間譜を読めるようになるためには、タンソを吹きながらよりも、まず歌って譜字どうしの音程を身体に覚えさせていくのがよい。

### Ⅲ タンソを日本の音楽教育に取り入れる可能性についての考察

#### Ⅲ-1. アマチュア向きのドルギ・タンソ

タンソの基本的な奏法を紹介したところで、次に、日本の音楽教育または音楽科教育にタンソを取り入れてみる可能性を考えてみたい。

タンソは長さ40センチメートル程度、重さ100グラム程度の持ち運びに適した楽器である。また、音域としては最低音がおおよそG♭3、最高音がおおよそG♭5である。アルトリコーダーと同じ程度の音域をカバーしていることになる。音色は、当然ながら尺八やケーナといった同族の楽器に似ている。一概には言いにくいだが、特別に好まないまでも忌み嫌う人のない、万人向きの音色だと言ってよいだろう。

また小型で軽い楽器を、身体正面に構える姿勢は自然である。指孔を押さえるには、基本段階では人差し指と中指が4センチ余り開けばよく、指孔は小さくてふさぎやすい。小学校高学年くらいから、手の小さい人でも使いこなせる。特別な訓練をしなくても、やさしい曲を吹くことが可能な、アマチュア向きの利点を備えた楽器である。音を出すコツをつかむまで、人によっては少し時間がかかるが、一度体得すると、自転車乗りや水泳と同じよう忘れてしまうことはない。

朴喜徳氏は、タンソはいざというときの武器にもなると話され、楽器だから特に丁重に扱うという気負いなく、腕前についても各段階の楽しみ方があるという考え方を示されている。プラスチック製のドルギ・タンソは、気軽に始めてみるができる点で、アマチュアが音楽を楽しむために大変良い楽器であると思う。

#### Ⅲ-2. 日本人の私たちがタンソを学ぶこと

私たち日本人がタンソを学んでみることには、どのような意義が見出せるだろうか。これについて、特に次の3点に絞って述べておく。

##### (1) 韓国の音楽への旋律楽器からのアプローチのために

1つ目は、もちろんタンソをとおして韓国の音楽が体験できるということである。本稿の第I節で述べているように、現在のところ韓国の音楽は、もっぱらサムルノリなど民俗音楽系の打楽器アンサンブルによって日本の学校現場に知られている。旋律楽器については、これまで特に採りあげて紹介されていない。タンソは、日本の学校で使用されているリコーダーと、価格の面では同程度、メンテナンスの面ではむしろ面倒が少ない。大学の

教員養成課程では、諸民族の音楽を、実技を含めてある程度習得することが必要であるが、タンソはすぐれた教材の1つになり得る。高校の授業における民族音楽の体験にも、よい成果を発揮する教材になるだろう。

音楽の学習という面では、旋律楽器としてのタンソ演奏を通して、韓国の古典音楽の深みや民俗音楽の特質に触れることが可能である。韓国の音楽には、もちろん雅俗や様式による差があるが、朝鮮民族の文化に属していない立場から見ると、幾つか顕著な特徴をすぐに感じ取ることができる。1つは本稿で概観した先行研究が強調している、リズム上の特徴であるが、また別の特徴として、きわめてピッチの振れ幅の大きいヴィブラートの技法というのがある。伽耶琴<sup>カヤグム</sup>など<sup>コト</sup>の類の演奏であれば、絃の張力を左手で押したり弛めたりして調節し、音のピッチは一瞬たりとも静止しないように感じられる。このような技法は「弄絃（ノンヒョン）」と呼ばれている。弄絃の技法は、弦楽器以外のものによる演奏、すなわち歌唱や笛の類による演奏にも顕著で、テグムやタンソなどの笛による伝統音楽の演奏では、奏者の首が静止する時はないように見える。それに伴い音も常にピッチが揺れている。

自分で井間譜を読みながらタンソを少し吹くようになると、古典音楽の演奏者がこの弄絃<sup>ノンヒョン</sup>の技法をどれほど駆使し、いかに元の楽譜に独自の味付けを施しているかが分かる。単に装飾音というようなものではなく、音楽構造全体をこの技法抜きには語れない。また、韓国の人が伝統的な旋律以外のものを吹く場合——たとえば朴喜徳氏が《Amazing Grace》等を演奏する場合——でも、この技法による独自の味付けは非常に興味深い。「これは韓国音楽だ」と言うにふさわしいような、弄絃<sup>ノンヒョン</sup>の技法による様式感が生まれる。

このような意味で、旋律楽器からアプローチして韓国音楽の面白さを感じ取るために、タンソを習うことは有効と思われる。

## (2) 日本の尺八への導入段階としてのドルギ・タンソの可能性

日本の中学校では、平成10年告示の学習指導要領によって、3年間で1種類以上の和楽器に触れることになったが、平成20年版の学習指導要領もこれを引き継いで、和楽器での表現活動を行うことが欠かせなくなった。音楽教科書（注5で述べた2社が発行している）は、どちらも和楽器の1つとして尺八を取り上げている。しかし尺八は、発音できるまでのハードルが高い。タンソは尺八と歌口のタイプが異なっているものの、丹田呼吸による安定した息を、ある角度でエッジにぶつけるという点では完全に共通している。筆者は、以前は管の内径が大きい尺八では安定した音を出すのが難しかったが、ドルギ・タンソで練習を積んでから、ずっとたやすく音が出るようになった。ドルギ・タンソはその意味でも有効に利用できると思われる。

一般に小学生や小柄な人にとっては、尺八の指孔は大き過ぎて隙間が出来てしまいがちであり、楽器本体も300~400グラムでやや重い。タンソを少しやっておき、後から尺八に移行するというのは良い考えだと思う。ドルギ・タンソで発音する練習をしておき、指孔をふさぐコツも体得した後ならば、尺八への移行はきわめて簡単である。

## (3) アマチュアがやさしいレパートリーを楽しむために

——韓国の音楽にこだわらず、自分流の音楽を楽しむ——

タンソで音を出し、やさしいレパートリーを演奏するには、特別な筋力や訓練の積み重ねは必要がない。長時間吹き続けたり、むずかしい曲を吹いたりするには訓練が必要であ

ることは言うまでもないが、それは中級以上になった場合のことである。それでいて、初歩段階から、浅い胸呼吸、肩呼吸ではなく、深い丹田呼吸を行うことを求められる。このことは、様々の年齢段階の人にとり、健康的な心身安定の一助となるだろう。

そして、何よりやさしいレパートリーが豊富である。タンソではじめに習う6音だけで吹ける曲は多い。仲・林・無・潢・汰・沖の6音（階名ではソ・ラ・ド・レ・ミ・ソ）が吹ければ、実質的には甲音域がすべて発音できることになり、「ソ・ラ・ド・レ・ミ・ソ・ラ・ド・レ・ミ・ソ」の2オクターブを使うと、きわめて多くの曲を演奏することが可能になる。この音づかい<sup>13</sup>は、階名でいうファ・シを使用しないもので、一般には「ヨナ抜き音階」として知られる。鍵盤楽器で遊ぶならば、黒鍵だけを使って奏することができる旋律でもある。文部省唱歌で、現在も小学校での指導が義務付けられている《うみ》、《かくれんぼ》、《夕やけこやけ》、《茶つみ》、《とんび》などはこれに当てはまる。よく知られた童謡でも、《チューリップ》（近藤宮子作詞／井上武士作曲）、（以下（ ）内は作詞者／作曲者）《ぞうさん》（まど・みちお／團伊玖磨）、《サッチャン》（阪田寛夫／大中恩）、《めだかの学校》（茶木滋／中田喜直）などがある。この音づかいは、日本人にも韓国人にもなじみが深く、両国で愛唱されているスコットランド民謡 “Auld Lang Syne”（日本では《蛍の光》）等の音づかひとも、共通している。演歌をはじめ流行歌にも多数の曲が存在し、枚挙に暇がない。若干例を挙げれば、《りんご追分》（小沢不二夫／米山正夫）、《北帰行》（宇田博／宇田博）、《星影のワルツ》（白鳥園江／遠藤実）、《北国の春》（いではく／遠藤実）などはこの音づかひによる。

本稿は、タンソの基礎奏法とその指導法に範囲を限定したため踏み込んでいないが、タンソではもちろん階名ファとシの音も出せる。またシャープやフラットの付いた音を吹くことも可能である。少し上達すれば1オクターブ内の12音をすべて使用して曲が吹けるようになる。一度タンソで音が出せるようになると、これら豊富なレパートリーから、自分が吹けるものを少しずつ増やす楽しみがある。それに、弄絃<sup>フンヒョソ</sup>ではないまでも、ヴィブラートやコブシをつけて、自分なりの吹き方・音楽のつくり方が楽しめるだろう。このような点も、私たちがタンソに親しむことから生まれる可能性である。

#### IV 作成資料：やさしい歌をタンソで吹くための井間譜

本稿では最後に、日本のやさしい歌を井間譜に書き表したものを、資料として付ける。大学の教員養成課程や高校の授業で、韓国の音楽を学ぶ機会には役立つことと思う。

- ・文部省唱歌《うみ》（井間譜1）
- ・文部省唱歌《茶つみ》（井間譜2）
- ・島村抱月・相馬御風作詞／中山晋平作曲《カチューシャの唄》（井間譜3）
- ・吉丸一昌作詞／中田章作曲《早春譜》（井間譜4）

以上の4曲である<sup>14</sup>。

\*謝辞：朴喜徳氏には、2010年1月の韓日合同ゼミナール以来、タンソのご指導を賜ったのみならず、楽器や資料をお送りいただいたり、メールで数々の質問にお答えいただいたりしている。ここに改めて感謝の意を表したい。감사합니다.

- 1 <sup>バク・ヒドック</sup>朴喜徳氏は、1958年生まれで、韓国国楽高等学校の第1期生としてテグム（伝統音楽の楽器の1つ。横笛。）を専攻、ソウル大学国楽科の卒業生である。いくつかの大学で教鞭をとる傍ら、生涯教育にかかわる活動の一環として、アマチュアへのタンソの普及と指導に熱心に取り組んでいる。教育哲学博士。
- 2 韓国伝統音楽における、リズム型を意味する言葉。多くの種類があり、固有の名称と特色がある。韓国伝統音楽では、これを強調しない音楽はないと言っても過言ではないという。一定拍数のまとまりが周期をつくり、さらに大きな周期につながる。また、どの長短も基本型どおりに打たれることはなく、即興的な変奏こそが韓国音楽の妙味であると言われる。
- 3 サムル（四物）＋ノリ（play）という語で、伝統的な4つの打楽器を用いたアンサンブルを意味する。1978年に、民俗芸能である「農楽（ノンアク）」を、舞台芸術として再構成した『サムルノリ』というグループが現れ、世界的に人気を博した。これが始まりとなって、現在はサムルノリという語がこの種の打楽器アンサンブルを表すものとして使われる。
- 4 朝鮮半島で広く使われている膜鳴楽器。70センチメートルくらいの砂時計型の胴の両面に馬皮を張り、ひもで締めて張力の調節をする。奏者から見て左側の革は低音、右側は高音で、時と場合で、手のひらや各種のバチを使い分けて打つ。
- 5 中学校教科書は教育芸術社、教育出版社の2社、高校教科書は音楽之友社、教育芸術社、教育出版社の3社が各社1種類以上を作成しており、それぞれ検定に合格して使用されている。
- 6 《アリラン》には、地方ごとに数えきれないほどのヴァリエーションがあるが、《京畿道アリラン》は日本では最もよく知られた旋律。実は1926年に製作された映画『アリラン』の主題歌として、《京畿道アリラン》に基づく旋律を使い有名になったという。
- 7 韓国では知らない人はないという曲。作曲者の洪蘭波<sup>ホンランバ</sup>（1897-1941）は日本に留学して西洋音楽を学び、20世紀前半の朝鮮半島の洋楽界をリードした一人である。
- 8 1990年代から日本の学校現場で一般化している、様式にとられない自由な発想による創作活動を表す言葉。英語のcreative music makingの訳語として発想された。
- 9 ・第1回ゼミナール：日本音楽教育学会日韓合同ゼミナール実行委員会『日韓両国の音楽教育の理念と実践—伝統音楽に着目して—』2008年6月、非売品。  
・第2回ゼミナール：韓国音楽教育学会『韓日両国の音楽教育の現在と未来』2010年1月、非売品。
- 10 朴喜徳「タンソ（短簫）とリコーダー奏法比較ワークショップ」、韓国音楽教育学会『韓日両国の音楽教育の現在と未来』2010年1月発行、pp.27-30。  
박희덕 “短簫” 도서출판오아시스, 2000.  
박희덕, 정은경 “단소길잡이” 현대음악, 2001.
- 11 Park, Heeduck, *Let's play the Danso*, The Nationwide Movement Headquarter for Playing the Danso, 2010.
- 12 音名に対応する絶対的な音の高さは、西洋においても過去300年余りの間に明白な変動があり、少しずつ高くなってきた。この表ではたとえば「仲呂」はGとなっているが、現在使われているタンソ（ドルギ・タンソを含む）では、「仲」の実音高は、ほぼ現代ピッチのAb（G#）に調律されている。
- 13 音楽の専門家の間でさえも「音階」という言い方が一般的であるが、本稿ではあえて「音づかい」としている。本稿で言及している曲は、使っている音は同じでも、長旋律、短旋律が入り混じっている。また、通常は旋律の終止音となる主音が、使用音域のどの位置にくるか、といった問題も重要なので、ひと括りに「音階」を使うのは差し控えた。
- 14 作詞・作曲者の没後50年を経て、著作権法に抵触しない曲から選定した。3/4拍子、4/4拍子、6/8拍子それぞれの書き方を参考にできるようにした。《早春譜》は易しいとは言えず、本稿で述べた基本の音以外の音が出てくるが、中学校の「共通教材」の1つで生徒が必ず習う歌になっているので、高校以上での学習につながると考え、ここに採り上げた。

【参考文献】

- 박희덕, (2000) “短簫” 도서출판오아시스.
- 박희덕, 정은경 (2001) “단소길잡이” 현대음악. (ISBN 978-89-5766-207-6 63670)
- Park, Heeduck, (2010) *Let's play the Danso*, The Nationwide Movement Headquarter for Playing the Danso.
- 植村幸生 (1998) 『韓国音楽探検』音楽之友社.
- 姜信子 (1998) 『日韓音楽ノート—〈越境〉する旅人の歌を追って—』岩波新書542.
- 韓国音楽教育学会 (2010) 『韓日両国の音楽教育の現在と未来』非売品.
- 草野妙子 (1984) 『アリアンの歌—韓国伝統音楽の魅力をさぐる』白水社.
- 櫻井哲男 (1989) 『ソリの研究—韓国農村における音と音楽の民族誌』弘文堂.
- 櫻井哲男 (1997) 『アジア音楽の世界』世界思想社.
- 島崎篤子／加藤富美子 (1993) 『授業のための日本の音楽・世界の音楽』音楽之友社、pp.101-116 「お隣の国に『こんにちは』」.
- 田中多佳子 (2007) 「韓国の打楽器アンサンブル『サムルノリ』の教材化をめぐる—小学校・中学校・高校・大学の音楽科教育における実践的共同研究から—」『京都教育大学教育実践研究紀要』第7号、pp.41-50.
- 坪能由紀子／望月由美子 (1993) 「世界の音楽に親しもう—私たちのサムルノリ・韓国の音楽に親しむ」、音楽之友社『教育音楽—中・高版』3月号 pp.88-91+4月号 pp.54-57.
- 日本音楽教育学会日韓合同ゼミナール実行委員会 (2008) 『日韓両国の音楽教育の理念と実践—伝統音楽に着目して—』日本音楽教育学会、非売品.
- 安田寛 (1999) 『日韓唱歌の源流』音楽之友社.
- 和田垣究 (1993a) 「韓国音楽の教材化における一考察—世界の音楽による音楽教育—」、日本音楽教育学会『音楽教育学』22 (2)、pp.51-60.
- 和田垣究 (1993b) 「韓国音楽の学習構造を探る」、日本音楽教育学会『音楽教育学』23 (2)、pp.27-30.
- 和田垣究 (1999) 「韓国伝統音楽の『3拍子』をめぐる」、日本音楽教育学会『音楽教育学』28 (4) pp.25-34.
- 国立劇場芸能鑑賞講座『日本の音楽—歴史と理論—』(1974)、独立行政法人日本芸術文化振興会.

井間譜1

= ♩  $(\frac{3}{4})$

うみ (文部省唱歌)

汰	つ	汰	う
汰	き	潢	み
沖	が	無	は
汰汰	のぼ	林潢	ひろ
潢	る	無	い
無	し	林	な
林林	ひが	仲仲	おお
仲	し	無	き
潢	ず	無	い
無	む	潢	な
△			

※ 歌詞は一番のみ

うみは広いな大きいな  
月がのぼるし日がしずむ



井間譜 2

$$\square = \text{♪} \left( \frac{4}{4} \right)$$

茶つみ  
(文部省唱歌)

△		△		△		△	
沖	あ	仲	あ	汰	の	仲	な
沖	か	無	れ	汰	に	無	つ
汰	ね	潢	に	沖	も	潢	も
潢	だ	汰	み	汰	や	汰	ち
一潢	す	一汰	え	一汰	ま	一汰	か
無	き	汰	る	汰	に	汰	づ
林	に	汰	は	潢	も	汰	く
仲	す	沖	ちや	汰	わ	沖	は
無	げ	一沖	つ	一汰	か	一沖	ち
潢	の	沖	み	潢	ぼ	沖	じゆ
一汰	か	汰	じゃ	無	が	汰	う
無	さ	潢	な	林	し	潢	は
	丨	無	い	林	げ	無	ち
	丨	潢	か	仲	る	潢	や
△		△		△		△	

※歌詞は一番のみ

夏もちかづく八十八夜  
野にも山にも若葉がしげる  
あれに見えるは茶つみじゃないか  
茜あかねだすきに昔すげの笠

井間譜3

  = ♪ (4/4)

カチューシャの唄 (島村抱月・相馬御風作詞 中山晋平作曲)

※歌詞は一番のみ

				仲	カ
無	み	林	め	無	チュ
一潢	に	一仲↑	て	一潢	ーシャ
汰	ね	林	あ	汰	か
沖淋	が	無潢	わ	沖淋	わ
沖	い	無	ゆ	沖	い
		一林	ー		
汰	を	仲	き	汰	や
無潢	くら	仲	と	無潢	わか
汰	か	汰	け	汰	れ
潢無	け	一潢	ー	潢無	の
林	ま	無潢	ぬ	林	つ
潢	しよ	無林	ま	潢	ら
無	か	仲	と	仲	さ
		仲	か	仲	せ

▲ここでは4の孔を半分くらいふさぐことにより、「仲」を高めにとる。

カチューシャかわいや 別れのつらさ  
 せめて淡雪とけぬ間と  
 神にねがいを ララかけましょか

